



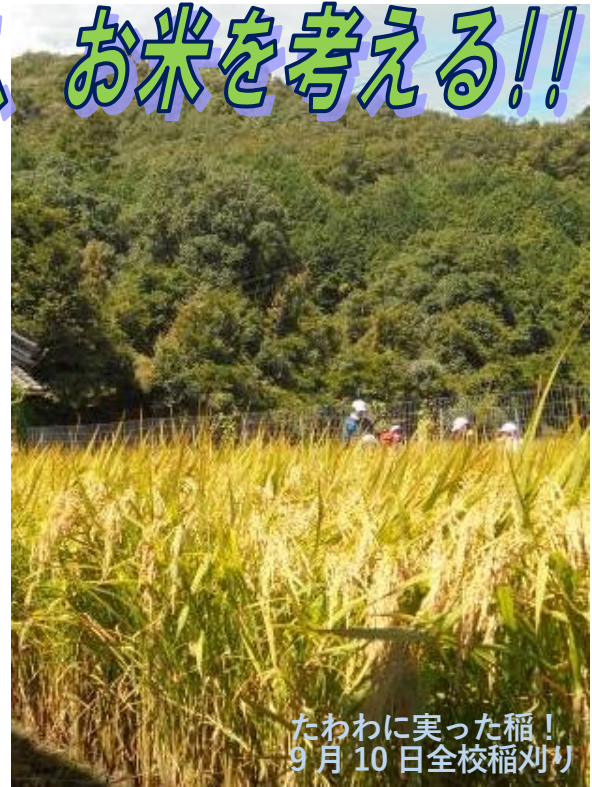
# 校長室だより

令和6年度

9月11日

NO.24

## 秦梨っ子の田んぼで、お米を考える!!



たわわに実った稲！  
9月10日全校稲刈り

テレビでもたまに稲刈りの様子が映し出されます。黄金に色づいた稲穂は、どこか懐かしい気分にさせてくれます。けれど、お米ができるまでの過程を知ると、とても大変であることが分かります。弥生時代に稲作が始まっていたことを考えると、昔から、これほど手間のかかる農作物を日本の主食にし、それを代々守ってきたことは、並大抵のことではなく、稲作が日本という国を作ってきたことに、驚きと尊敬を感じます。

残暑厳しい九月ではありますが、田んぼには赤とんぼが無い、学校田の稲は、今年もたわわに実をつけました。一年生もおそろおそろ、汗びっしょりで、高学年の子に教えてもらいながら、自分の手で初めて稲を刈りました。秦梨の「当たり前」(伝統)が受け継がれていくのを、間近に感じます。「ふるさと学習」が体験を通し、地域の中で学ぶ学習であることを実感します。

最後に田の先生より子供たちに課題が示されました。「日本のお米は高いか安いか」と。子供たちの中には最近の米不足の報道を見ている子もあり、「高い」「安い」どちらの意見も出てきました。その中で、清美さんは、「安い」とおっしゃられました。苗代や肥料代などが高く、稲刈りで使ったコンバイン一台の値段もかなりの高額だと教えていただきました。子供から「稲刈りの大変さを知り、機械の重要性が分かりました」という声もあり、私たちがこうして稲作りをするのにも、膨大なお金と手間がかかっていることを知りました。そしてそれを仕事としている農家にとって、確にお米の価格は、出荷までの苦勞を考えると、適切であるとは言えないであろうと、実感しました。体験を通して何を学ぶかは、学習においてはとても大事なことです。「体験あって学びなし」ではなく、体験を自分事としてとらえ、課題に向き合えるようにしていきたいと考えました。

・稲刈りでは田の先生の畔柳浩司さんと鈴木清美さんにご指導いただきました。今年から、学校田の場所は変わりましたが、たくさんのお米が収穫できました。ありがとうございました。